

25 中国におけるテリアカの受容

中村 輝子・遠藤 次郎

幅広い薬効を期待でき、鎮痛作用のある生薬製剤を設計する一助として、我々はテリアカの再検討を進めている。その過程で、中国におけるテリアカの受容に興味を覚えたので、これについて報告したい。

中国におけるテリアカの最初の記述は、唐代の『新修本草』であり、第十五巻獸類部に「底野迦味辛苦平無毒主百病中惡客忤邪氣心腹積聚出西戎」、「彼人云用諸膽作之状似久壞丸藥赤黑色胡人時將至此亦甚珍貴試用有効」と記している。この記述は、ほぼそのまま、後の時代に引き継がれている。

ギリシャ医学からアラブ医学やヨーロッパの都市薬局方に継承されたテリアカは一般にきわめて多くの生薬からなる。これらと比べると、中国で記述された「諸膽」からなるテリアカがだいぶ違うことがわかる。このよう

なテリアカの記述から判断して、中国では外国由来の、この薬物を正しく把握できなかったのではないかという見方が一般的である。

著者らはアラブ医学におけるテリアカを調査する中で、泉彪之助先生のご厚意により、マイモニデス(Moses Maimonides, 1135—1204)が一一九八年に記した著作の英訳本、“*Treatise on Poisons and Their Antidotes*” Ed. By S. Munther (1966) を調べることができた。マイモニデスは当時のエジプトの主権者、サラディンの宮廷の医師であった折、大衆用テリアカとミトリダテス砒剤の管理を命ぜられ、サラディンの第一の側近、カーディー・アルファーデルの求めに応じて、本書を著した。この中で、マイモニデスは「全ての種類の毒に特別な作用をもつ単味薬と複合薬を *Bezeleriyeh* と言うが、これはペルシャ語の *bezour* に由来する」と述べ、「複合薬として、大テリアカ、ミトリダテステリアカ、4種のテリアカを、単味薬として、エメラルド、動物のベゾール」などを挙げている。また、動物性のベゾールの解毒作用を述べるとともに、「これは緑色く青緑色のドンダリの

ようなもので、(動物の)胆嚢で形成され、層状をなしている」と記している。

このことを考慮すると、『新修本草』などが「諸膽」として記述したテリアカは、アラブ医学のベゾアールである可能性も浮上する。

中国におけるテリアカの記述は十三世紀以前に編纂されたと言われる『回回薬方』にも見られる。本書は、「荅児牙吉即是七八十味或百十味薬合成的膏子」として、アラブ医学本来のテリアカを記している。しかしながら、『本草綱目』(一五〇九年)では未だにテリアカを「猪膽」としている。この事実は、中国伝統医学では、本来のテリアカが後代に至るまで理解されなかったことを示唆している。

この理由を考える上で、テリアカと同様、中国伝統医学が西域から導入した解毒薬、「アガタ薬」との比較が参考になる。アガタ薬は唐代の経方書、『千金翼方』にも収載されているインド医学由来の解毒・万病薬である。アガタ薬の処方が仏典の中にも記されていることから(『陀羅尼集経』、『不空罽索神変真言経』など)、中国伝統医学の

経方書に収載されているアガタ薬は仏典を介して導入された、と考えるのが妥当であろう。

これに対して、テリアカは薬品として中国に伝わったと推定される。本来のテリアカは練り薬(マジュン)であるが、丸薬にも容易に作り得る。このため、中国に伝わったテリアカが多味の薬剤からなる丸薬であるか、あるいは、「諸膽」であるか、判別が困難であったと推定される。

江戸時代、日本にもオランダからテリアカが導入された。多数翻訳されたテリアカの処方の中に、複合製剤に混じって、「狗宝」、「猪胆、龍胆」など、ベゾアールに関連したものも含まれている。これらのことも考慮すれば、中国におけるテリアカの混乱は、アラブ医学の解毒剤の中に、複合製剤とベゾアールとが共存していたことに由来すると理解するべきであろう。

(東京理科大学薬学部薬用植物・漢方研究室)